

ケインズ「わが孫たちの経済的可能性」について

The Ramsey-Keynes Controversy on Saving

本 郷 亮

Ryo Hongo

I 問題設定

J.M. ケインズの将来世代論「わが孫たちの経済的可能性」(“Economic Possibilities for Our Grandchildren,” 1930, 以下「わが孫たち」と略す)は、「合理的にみて、今後 100 年間のうちに、我々の経済活動水準はどれ程に達すると予想できるだろうか。我々の孫たちの経済的可能性はどんなものだろうか」という問題意識から書かれたエッセイであり、そこでなされた経済的桃源郷の到来の予言は特に有名である。けれども、なぜ彼がこの時期にそうした議論を公にせざるをえなかったのか、という点はこれまで全く説明されていない。

実は「わが孫たち」は、決して唐突なものではなく、1920 年代のケンブリッジ経済学の展開が必然的に生み出した主張である。本稿の課題は、同エッセイの思想的・経済学的意義を、ピグーおよびラムゼーらの議論に照らしつつ、明らかにすることである。

そのために、まず「わが孫たち」の内容を検討し(第Ⅱ節)、次にその背景を探るべく、ラムゼーの議論(第Ⅲ節)とピグーの議論(第Ⅳ節)とに目を向ける。そして以上の考察をふまえつつ、より視野を広げて、当時のケンブリッジ経済学の抱えていた知的対立を明らかにしたい(第Ⅴ節)。

Ⅱ 「わが孫たち」の内容

「わが孫たち」は、大きくみて、①経済的桃源郷の到来の予言、②エセ道德原理批判、という 2 つの部分からなる。以下ではこれらを要約しておく。

まず①について。ケインズによれば、16 世紀の大航海時代以来の「複利の力」による幾何級数的な資本蓄積は、それが惹起した人口増加にもかかわらず、欧・米での平均生活水準を「約 4 倍」に向上させた。未来に関する彼の展望も同じく楽観的である。すなわち、「私の結論は次の通りである。すなわち重大な戦争と顕著な人口増加とがないと仮定すれば、経済問題は 100 年以内に解決されるか、または解決のめどがつくだろう。これは将来を見通す限り、経済問題が人類の恒久的問題でないことを意味する」(JMK, IX: 326)。

ただしケインズは経済的桃源郷、すなわち「経済的ブリス」の到来を力強く予言する一方で、有史以来の人類の伝統的目的たる経済問題が消滅する必然的帰結として、余暇の増大が大衆を「神経衰弱」に陥らせる危険をも指摘している。「イギリスやアメリカにおいて、富裕な階級の妻ら、すなわち不幸な夫人らの間ですでにありふれたものになっている神経衰弱」がそれである。「・・・人生を耐えうるのは、歌うことのできる人々にとってだけだろう。我々の中で歌える者は何と少ないことか!」「自分の身を処するのは、特別な才をもたぬ普通の人には恐るべき問題である」(pp.327-8)と²。

次に②について。①を論じたのち、ケインズは「エセ道德原理 pseudo-moral principles」の批判へと筆を進めている。経済的ブリスに到達すれば、すなわちさらなる富の蓄積がもはや意味を失う時代に到達すれば、我々の古い道德(エセ道德原理)が一新される、彼はそう主張するのである。

「我々は、200 年にわたり我々を悩ませてきた多くのエセ道德原理から解放されるだろう。このエセ道德原理のために、我々は最も忌み嫌うべき人

間性の一部〈蓄積願望〉を最高の徳として崇め奉ってきたのだ。『『目的意識的な』人は、自分の行為についての自分の関心を将来に押し広げること、自分の行為に対して見せかけだけのごまかしの不朽性を手に入れようとする。彼が可愛がろうとするのは自分の猫でなく、その子猫、いや実際には子猫でもなく、子猫の子猫という風に、猫族の果てるまで永久に求め続けてゆく。・・・このように自分のジャムを常に将来へと押しやることで、彼はジャムを作る自分の行為に不朽性を手に入れようと奮闘する』。

そしてケインズは、経済的プリスに到達するまでは蓄積欲や慎慮が我々の神でなければならないと認めながらも、来るべき経済的プリスにおける心のあり方を次のように描いた。「我々はもう一度、手段より目的を高く評価し、効用よりも善を選ぶことになる。我々は、この時間この一日の高潔で上手な過ごし方を教える人、物事の中に直接の喜びを見出せる人、汗して働かず、また紡ぎもしない野の百合⁴のような人を尊敬するようになる」と(JMK, IX: 329-31, 傍点追加)。要するに、16世紀以来の資本蓄積の精神的原動力であった「慎慮(の徳)」その他の意義は歴史的に相対化され、それらはある特定の歴史段階にのみ妥当する特殊なエセ道德原理と捉えられたのである。

このエセ道德原理批判の意図は、例えば、A. マーシャル『経済学原理』の次の章句を念頭におけば分かりやすいと思われる。「・・・資本の供給は、資本を蓄積するために人々は展望的 prospectively に行動せねばならないという事実により支配される。すなわち人々は『待た』ねばならず、『貯蓄』せねばならない。彼らは将来のために現在を犠牲にせねばならない」(Marshall, 1961, vol.1: 81)。つまり資本蓄積は「歌う」ことでなく「待つ」ことで達成される。ケインズが最終的に否定しようとしたのは、未来のために現在を犠牲にするこうした態度、いわば自己目的化した禁欲(貯蓄)であり、また彼が肯定したのは今を活動できる人、すなわち「歌える者」である。

以上が「わが孫たち」の骨子である。従来このエッセイは、もっぱら①の経済的プリスの予言のみが目されてきたが、それは②のエセ道德原理批判と表裏一体であることに注意すべきである。

換言すれば、エセ道德原理を乗り越えるという道徳的目的のために、経済的プリスという幾分空想的な経済状態が設定されている。今日のジャムを明日のジャムと関連させる発想は、経済的プリスに到来するまでの過渡的道德にすぎず、ついには「野の百合」の道德に道を譲るとされるのである。

Ⅲ ラムゼーの最適貯蓄論

本節の課題は、ケインズ「わが孫たち」の直接的な執筆契機・批判対象としての、功利主義経済学者ラムゼー(Frank Plumpton Ramsey, 1903-30)の「貯蓄の数学理論」(“Mathematical Theory of Saving,” 1928)を考察することである。

1924年にキングズ・カレッジのフェローとなったラムゼーは、その優れた才能によってたちまちにケンブリッジの哲学界・経済学界の寵児となったが、1930年、不幸にも20代半ばの若さで他界した。その短い学問的生涯は主に哲学方面に向けられたが、経済学方面でも2つの論文が残されている。1つは最適課税問題に関するもの(Ramsey, 1927)⁵、そしてもう1つが、最適貯蓄論・成長論の古典的定式化として、また最適制御理論と呼ばれる数学テクニックを経済学に初めて応用した最も初期の文献の一つとして有名な「貯蓄の数学理論」(Ramsey, 1928)であって、本節で扱うのは後者の論文に限られる。

簡単に言えばそれは、通時的な効用最大化を満たすための最適貯蓄率を明らかにしたものである。より多く貯蓄すればより早く資本が蓄積される(経済が成長する)ので、未来の効用は高まるが現在の効用は減ってしまう。つまり我々は消費と貯蓄との間で、換言すれば現在と未来との間で、選択を迫られる。なお、資本ストックの状況に応じて、したがって時点時点に応じて、最適貯蓄率は刻々と変化するのは言うまでもない。

彼の提示した解は、今日「ラムゼー・ルール」と呼ばれている⁶。このルールを満たすということは、経済学的に言えば、資本蓄積の最適経路上を歩むということであり、功利主義倫理的に言えば、あらゆる今・今・今において、その1つ1つの今がいわば永遠・動学的善と調和した今を生きているということである。

ところで、先の問題を論ずる上で、ラムゼーは特に重要なものとして以下の3つの仮定を置いた。

- ①関数は十分な強凹性(限界効用の通減性)をもつ⁷。ゆえに効用の値は、ある一定の最大値に収束する。ラムゼーはこの最大値を「ブリス」、すなわち「獲得可能な限りでの快樂ないし効用のフローの最大値」と呼んでいる。ブリスは、効用の飽和水準であり、また資本蓄積の停止する定常状態に対応している(効用が飽和すれば、もはや資本蓄積＝経済成長するメリットがないため)。
- ②人口増加および技術革新はない。
- ③未来の効用を割り引かない。すなわち「〈未来を〉割引く行為は倫理的に考えて容認しえず、それはただ創造力の欠陥を源泉とするにすぎない」(Ramsey, 1928: 543, 訳 137)。「未来の割引」を禁ずるこの仮定は、ラムゼーの思想的立場を色濃く示すものなので(次節でみるようにこれはピグーの議論を踏襲した仮定なのだが)、非常に重要である。

またブリスへの到達については、将来の戦争・地震の可能性がなければと前置きしつつ、次のように述べられた。「短期間に膨大な貯蓄がなされるのは不可能であるから、均衡に到達するのに数世紀かかるかもしれない、均衡に漸近するだけで到達不可能かもしれない」(pp. 556, 訳 157, 傍点追加)と。

以上が「貯蓄の数学理論」の骨子である。それは少なくとも次の2点で、ケインズ「わが孫たち」と見事に対応する。すなわち、第1にケインズの「経済的ブリス」という言葉は、おそらくラムゼーの「ブリス」から示唆をえたものだろうが、いずれも経済的桃源郷を示すものである。なお、ラムゼー以前には「ブリス」という語は経済学文献では殆ど用いられていなかったと思われる(むろんケインズも用いていない)。第2に、ラムゼーの通時的功利主義思想はまさにケインズのいう「エセ道德原理」そのものである。

さらに、「貯蓄の数学理論」を『エコノミック・ジャーナル』誌に投稿したラムゼーと、当時の同誌の編集者ケインズとの間には書簡のやり取りが

あり(JMK, XII: 784-9)、そこから、①ラムゼーが自覚的に「功利主義を貯蓄に適用」したこと(ケインズは反功利主義者であった)、②ケインズが、論文を修正するように説得するべく、ラムゼーを自分の別荘に招いたこと(だが結局ラムゼーは論文の中でケインズのアドバイスを紹介しながらも、それを明確に斥けている)、③ラムゼー宛の書簡でのケインズの一部文章(イギリスの資本蓄積がドレイク船長によるスペイン船からの金略奪に始まるという挿話)が「わが孫たち」にパラフレーズしていること、が明らかである。

さらに、④「わが孫たち」の公表は30年であったが、それは28年に書かれた原稿が土台になっていたこと、つまり2人の論文がほぼ同時期に書かれたことを付言しておく。

以上のことから、ケインズ「わが孫たち」とラムゼー「貯蓄の数学理論」とが密に関連すること、また前者が後者を批判するために書かれたこと、は明白と思われる。

ラムゼーは、ケインズとは親密であったと同時に、『確率論』批判の急先鋒でもあったので、哲学分野でのこの2人の関係は従来から注目されてきた(伊藤, 1999)。しかし経済学分野での2人の対立は全く看過されてきたと言わざるをえない。実は、ラムゼーは哲学・経済学の両分野でケインズに対峙していたのである。

IV ピグーの将来世代論

前節でみたラムゼーの最適貯蓄論は、20年代のケンブリッジ経済学の動向の中でどう位置付けられるだろうか。その一つの解答は、ピグーの将来世代論を再評価した Collard (1996)⁸ によって与えられている。すなわち、将来世代の善が現代世代によって割引いて評価されることへの反対と、資源を守るための国家介入の承認とは、ケンブリッジでは「シジウィック＝マーシャル＝ピグー＝ラムゼー」という強固な伝統を有するものであり、中でもピグーはこの問題を「最も明示的かつ広汎に」扱った中心人物であった(Collard, 1996: 585)。

本節の課題は、ピグーとラムゼーとの間に思想上・経済学上の共通性を見いだすことで、ラム

ゼーの貯蓄論がピグーの将来世代論からの発展であったことを示すことである。

ピグーは「資本蓄積（有形無形を問わず）」や「資源保全」といった諸問題に深い関心を抱いていた。これらはある意味では、世代と世代との間の分配問題、すなわち世代間正義問題と言ってもよい。

彼の『厚生経済学』（*The Economics of Welfare*, 以下EWと略す）の第1編第2章「願望と満足」では、異時点間効用配分の観点から、人々が将来の満足をあまりに大きく割引くことの弊害と対策とが論ぜられている（1932年の第4版では、1920年の初版よりも一層詳しく論ぜられている）。この強すぎる時間選好の主因は、(a)「不十分な望遠能力 defective telescopic faculty」、すなわち未来の自分ないし未来の人々の満足に対する想像力・共感力の欠如、(b)人間の死すべき運命、の2つである。そしてピグーは「未来の快楽を縮尺で眺めること」を戒め、(a)を発達させよと啓蒙的に主張し、環境に対する現在世代の責務を説いたのであった。

「人の命は限られ、仕事や貯蓄の成果がかなりの期間をへた後に生じる場合、その努力を報いられるべき当の本人がそれを享受することはない。これは彼の願望の向けられる満足が、自分自身の満足でなく、誰か他人の満足であることを意味し、それは彼がその利害を自分自身の利害とほぼ同一視する彼の直接的後継者の満足かもしれないし、あるいは彼が殆ど全く気にも留めないような血筋的・時間的に全く遠い人かもしれない」。「時に人は、その必要とするものを・・・破壊的方法で得ようとする。上質の炭層を性急に掘り、上質でなくともまだ価値のある層を埋没させ無駄にするような採掘法、特定魚種を絶滅に至らせるような繁殖期を無視した漁法、土壌の肥沃さを消耗させる農法などは、いずれもその例である。またある世代の人々が・・・今豊富にある自然資源をつまらぬ目的に用い、将来世代の人々にとって稀少なものとし、非常に大切な目的のためにすら容易に入手できなくする場合にも、〈通時的〉経済満足の総量を減らすという意味では浪費がある。高速船に大量の石炭を用い、すでに短い渡航時間をさらに少しばかり短くするのはこの種の浪費の例で

あり、おそらく我々の子孫の渡航を全く不可能にすることで、我々はニューヨークへの渡航時間を1時間短縮できるのである」(EW第4版:26-8)。

こうしたピグーの主張は、Collard (1996) が指摘したように、またピグー自身もその箇所でシジウィックの著作を参照したように、明らかにH.シジウィックの影響である。

シジウィックは、次のような3つの原理を提示していた(塚崎, 1992: 160-1)。すなわち、①「ある人のある行為が彼にとって正しいなら、同じ行為は同様な状態にある同様な人すべてにとって正しい」という正義 justice ないし公平 equity の原理、②「人は自分の全体としての善を目指すべきである。すなわち人は現在の善と同様に将来の善をも（現実性の違いを考慮した上で）配慮すべきである」という慎慮 prudence ないし合理的自愛 rational self-love の原理、③「いかなる個人の善も、全世界の観点からすれば、他の個人の善より重要だということはない。そして理性的な者は、自分の努力で達成可能な限り、一般の善をめざすべきで、その特定部分のみをめざすべきでない」という合理的仁愛 rational benevolence の原理。

先のピグーの議論との関わりでは、特に②が鍵となる。シジウィックによれば「現在の小さな善が、未来の大きな善よりも、選好されるべきでない」。なぜなら「前か後ろかという単なる時間の違いは、一時点の意識を他の時点の意識よりも尊重する合理的根拠にならない」からである (Sidgwick, 1996: 381)。

さて、未だ存在しない将来世代の利害を代弁し、世代間正義を確保する主体は、現在世代の個々人が自発的・共感的にそれをしない限り、国家以外にありえまい。そこでピグーは具体策として、貯蓄を優遇する税の導入を検討する。

「・・・我々の分析は、ある適切な程度を選んで貯蓄に有利な差別化をすることで、〈通時的〉経済厚生が増加されうるのを示している。むろん国家が、その市民を強いて、客観的なこれこれの量の富が、現在および将来において正確に等しい重要性をもつように行動させるべきだ、などとは誰も主張しない。・・・だが我々が、不合理に割引いたり、我々の子孫より自分自身を選好したりする影響から、国家が将来世代の諸利害をある程度

守るべきことは、広く同意されている。アメリカでの『資源保全』のあらゆる運動はこの確信に基づくのである。一国の限りある自然資源が性急かつ無謀な浪費をうけぬよう監視し、必要ならば法的手段によってこれを防ぐのは、現在の市民のみならず未だ生まれない子孫らの受託者たる政府の明白な義務である」(EW 第4版: 29-30, 傍点追加)。

だがここでジレンマが発生する。周知のように、彼の厚生経済学的主要政策課題の一つは現在世代の人々の間での富・所得の平等(世代内平等)の実現であり、その代表手段が相続税・所得税といった累進的直接税なのだが、しかるにピグーはこれらが貯蓄を抑制し、世代間不平等を拡大するとみていた。逆に、内国消費税のような間接税ならば消費は抑制され、世代間正義に有利だが、この種の逆進的諸税は世代内正義に不利である⁹⁾。つまり課税論の次元では、世代間正義と世代内正義は両立困難となる。

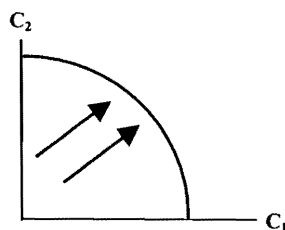
結局ピグーは世代内正義をまず優先し、ある程度、世代間正義に配慮するという妥協策を説いたが、これは何ら彼の後退を示すものではない。なぜならこれは本質的にバランスの問題であって、むしろ彼がそれら両方を視野に入れたこと、またその問題設定の斬新さを評価しうるからである。そして彼が望んだように、もし人々が自発的に望遠能力と自己犠牲能力とを発達させれば、将来世代の利害を代弁する国家の機能はそれだけ縮小しうるから、このジレンマもその分だけ自ずと消滅するだろう。

ピグーが貯蓄を重要視したことは、いわゆる「国民分配」概念とも無関係でない。例えば、もし現代の経済厚生しか視野にないなら、国民分配は経済的厚生の指標としてはあまり優れたものでない。なぜならそれは貯蓄－現在の満足でなく将来の満足を生むもの－を含むから。ピグーが『厚生経済学』初版の第1編第3章「国民分配」で、フィッシャー流の「所得」概念とマーシャル流の「国民分配」概念を比較検討したのは、まさにこの問題意識からであった。フィッシャーの場合、今年作られた一つの楽器または一着のコートは、所得というより資本への追加であり、これら財から今年中に人々が引き出したフローと

しての満足のみが「所得」にカウントされる。こうした把握はピグーも認めるように、その年の経済厚生を示す指標としては優れており、その限りでは魅力的である。だが将来の経済厚生にも配慮すべきであるなら、現在消費のみならず貯蓄をも包含するマーシャルの「国民分配」の方が都合がよい。

「我々が1920年における彼〈マーシャル〉の意味での国民分配に生じた影響を述べるとき、我々は1920年度およびそれ以後のあらゆる年度の消費に対する影響を、予想されうる限りで、暗黙裏に含めている。なぜならこれら影響は、工場に設置された資本価値の中に初めから反映されているから」(EW 初版: 35)。このようにピグーは通時的な経済厚生を最大化するという見地から、年々の総消費でなく、年々の経済活動の総体を彼の分析の中心に据えたのである (Collard, 1996: 587)。

図1 通時的な消費フロンティア



有名なピグーの「3命題」のうち、成長に関する「第1命題」と安定消費に関する「第3命題」との図解は容易である。前者は図1の矢印が示すようなフロンティアの拡大、後者は所与のフロンティア上での C_1 と C_2 との均等、である。

世代内平等に関する「第2命題」は、 C_1 内部の分配状況に関わるので、この図では示せないが、しかし無関係ではない。すなわちフロンティアを広げる上で、(技術革新、人口とならんで)貯蓄は重要な役割を演ずるが、もし資本(K)成長率が人口(L)成長率を上回れば、それは資本深化(資本装備率 K/L の増大)を意味し、結果、労働は相対的稀少となり、限界労働生産力=実質賃金は上昇し、利子率は下落する。これは労働者の所得増、資本家¹⁰⁾の所得減を意味する。

ゆえに資本蓄積は平等化を促すだろう(ただし逆は必ずしも真でない)。彼にとって貯蓄は、課税

論上で両立困難だった世代内正義と世代間正義とを、両立させうるかもしれないキー変数である。「現在の条件下では・・・発明・改良を別にすれば、資本一般の供給を増やすことで国民分配分を拡大させる要因が、同時に、労働の実質所得を減少させることは實際上不可能だ。むしろ同様に、資本一般の供給を減らすことで国民分配分を縮小させる要因が、同時に、労働の実質所得を増大させえない・・・」。つまりこの領域で不調和 *dis-harmony* は起こりえない」(EW 初版: 707)。なお、「不調和」とは、ある経済政策が、第1命題にとって有利だが第2命題にとっては不利だというような、「3命題」間のトレード・オフ関係の意である。

以上の考えは、後のケインズの「金利生活者の安楽死 *euthanasia of the rentier*」論、すなわち資本蓄積を通じての利子所得減少論に通じるものがある。ただしピグーと決定的に異なるのは、ケインズが貯蓄の徳を重視せず、有効需要論の立場から、C1の増大という意味での世代的利己心が経済成長を促し、その意図せざる結果としてC2も増大するとみる点である。ここに一つのアイロニーがある。

最後にピグーとラムゼーとの関係について¹¹⁾。経済学論文の執筆をラムゼーに勧めたのはピグーである。ピグーは、本節でみたように将来世代に関する様々な問題を提起したが、その理論的コアともいえる貯蓄の問題を厳密に取り扱う数学能力をもたず、その定式化を若きラムゼーに委ねた。一方、ラムゼーはケインズ宛の手紙の中で、経済学論文の執筆を「時間の無駄」とし、その脱稿を喜んでいる。その理由は定かでないが次の2つが考えられる。1つはピグーの協力要請が強引だった可能性、もう1つはそれが彼本来の関心であった哲学研究を妨げた事実である。

「時間の無駄」の一語をもって、彼は本意でない論文を書くことを強いられた、ないし彼は自身の業績を放棄した、などと解するのは極端にすぎ、実際奇妙である。だが、ピグーとラムゼーの間には思想上の強い共通性が認められるとはいえ、2人の人間関係については未だ不明な点の多いことを我々は認めざるをえない。

V ケインズの「短期」の思想的側面

前節までの考察により、ケインズの「わが孫たち」がピグー＝ラムゼー流の通時的功利主義思想へのアンチテーゼであったことが明らかにされたので、本節ではこの新たな光に照らしつつ、「わが孫たち」以外の文献にも目を向けてさらにケインズの立場を考察してゆきたい。

ところで、将来より現在を優先するケインズの思想は何に由来するのか。シュムペーターはかつて、「彼(ケインズ)には子がなく、その人生哲学は本質的に短期の哲学だった」(1951: 275, 訳 387)と指摘した。ここには子をもたない人々についてのシュムペーターらしからぬ偏った認識があるように思われるが、しかし彼の言わんとした事柄は重要である。

その根底には、G.E. ムーアの『原理学原理』(*Principia Ethica*, 1903) 第5章における、帰結の推論に対する極度の懐疑がある。ムーアによれば、我々は「無限 *infinite* の未来」を推し量りえず、せいぜい「直近 *immediate* の未来」しか知りえない。そしてケインズは『確率論』(*A Treatise on Probability*, 1921) の第26章「確率の行為への応用」において、このムーアの議論を踏襲・引用しつつ、「おおむね帰結の集計と関わりを有した功利主義的倫理学」を攻撃し、いわば短期の倫理学とでもいうべき議論を展開したのであった。

すなわちケインズは功利主義の「最も根本的な困難」として、①善の大小が数量的に測定可能で、算術的に足し算可能とされる点、②確率の大小が数量的に測定可能とされる点、の2つをあげ、これらを前提した「数学的期待」はごく限られたケースにしか妥当しないと主張する。ゆえに彼によれば、**P**を各期の善が実現する確率を表すベクトルとし、**G**を各期の善の量を表すベクトルとすれば、「 $\max. \sum \mathbf{P} \cdot \mathbf{G}$ 」といったような通時的功利主義の行動規範は、「正しい」とは言えない(*JMK*, VIII: 341-4)。

彼によれば、たとえ数学的期待値が等しくとも、不確かな大きい善より、確かな小さい善を選ぶのが「正しい」のであり、誤って前者を選択することは『『道徳的』危険 *'moral' risk*』と呼ばれる。「・・・小さいが比較的確実な善は、大きいが

それだけに不確かな善よりも、よい。これを主張するために、我々是有機的善というこの一つの理論を受け入れさえすればよい」(p.353)と。

すでに見たようにピグー＝ラムゼーにとっては、現在を偏愛する近視眼性こそが危険（と呼ぶべきもの）なのだが、ケインズにとっては逆に、長期的善（未来）のために短期的善（現在）を犠牲にする功利主義倫理学こそが「道徳的危険」であり、まことに対照的である。

また、ラムゼーは28年論文の末尾で、時間選好率の異なる、したがって貯蓄率の異なる2種類の家計を比較し、これら家計のそれぞれの運命について、「・・・こうした場合、社会が2集団に分解するのを通じて均衡が実現し、均衡では儉約な家族はブリスを享受し、将来に備えない家族は最低生存水準に陥る」(Ramsey, 1928: 559, 訳162)と述べていたが、逆にケインズはこうした儉約論には一貫して批判的であり、例えば、「将来を考えない浅はかな習慣をやめよと説き勧める」試みのもとらす悲惨な結末が、『貨幣論』(*A Treatise on Money*, 1930)においてバナナ園の寓話として描かれている(JMK, V: 158-60)¹²。

さらに同書の第30章「歴史的例証」では、一層本格的な節約批判がなされ、世界の富を築いたのが企業活動であること、活動を生むのは貯蓄でなく消費であること、が力説された。ケインズはこの線に沿って経済史を初めから書き直す必要性を指摘し、シュメール、エジプト、アテネ、カルタゴ、ローマなどの古代文明から、近代のスペイン、イギリスに至る、そうした歴史のスケッチを自分の手で描いている。そしてこの文脈中に、次のような注目すべき章句がある。「・・・ついでながら我々が注意してよいもう1つの一般化 generalisation がある。それは経済学者のいう『短期』の長さに関わるものである。一つの『短期』は一人の人間より長生きするのを何とも思っていないように思える。一つの『短期』は偉大な一国民の興亡を含むのに、そしておそらくそれを企てるのに十分なほどに長い」(JMK, VI: 141, 傍点追加)。

つまり一般化された「短期」は、文明の盛衰すなわち動的な成長・蓄積過程を包摂している。ケインズには「長期」諸問題への配慮がないのではなく（彼はピグー＝ラムゼーに劣らずそれを強く意

識している）、ただそれに対して、極めて逆説的ではあるが、ムーア的な「短期」規範論を掲げて挑んだのである。だから彼のいう「短期」とは、具体的な時間の長さを示す概念というよりも、むしろ一つの規範的態度、いわば今、今、今、という永遠の現在を示す概念であり、明らかにそれはピグー＝ラムゼーらの功利主義的「長期」規範論へのアンチテーゼなのである。

最後に、こうした「短期」規範論と密接に関連するケインズの貯蓄批判が、非常に一貫したものであったことを示しておくべきだろう。というのも、ケインズの貯蓄批判はあくまで不況という文脈で解されるべきだ、という意見もあるからである。だがこれに対しては反証をあげる。

①『『貯蓄』の義務が美德の9割となり、ケーキの成長が真の宗教の目的となった。ケーキを消費しないことをめぐって、他の時代には世間から身をひいて、享楽術のみならず生産術をも無視してきたピューリタニズムの全本能が成長した。そして、そのようにして、ケーキは大きくなっていった。だが何の目的のためかははっきり考えられていなかった。・・・ケーキの美德は、それが決して消費されぬこと、貯蓄者本人によってもその子孫によっても決して消費されぬこと、にあった」(JMK, II, *The Economic Consequences of the Peace*, 1919: 11-2)。この引用は、時期的にみて不況とは全く無関係であって一逆に戦後ブームの時期にあたっている一、明らかに思想的色彩の濃いものである。またケインズが言わんとしている思想的内容も、本稿の考察によって明らかだろう。

②「その時代の道徳も政治も文学も宗教も、こぞって貯蓄増強の大陰謀に加わった。これほど熱心に子どもの胸に叩き込まれた義務があったろうか」(JMK, IV, *A Tract on Monetary Reform*, 1923: 6)。この引用もまた、内容的にみて経済論というより思想論的色彩が濃い。

③『貨幣論』については先にもふれたが、それらに加え、「寡婦の壺 widow's cruse」の有名な逆説がある。「・・・企業者らの資本増加の源泉たる利潤は、そのうちのどれほど多くが放恣な生活にあてられても、空にならぬ寡婦の壺である。これと反対に、企業者らが損失を蒙りつつあるため

に、彼らがその正常な消費支出を切りつめることで、すなわち前より多く貯蓄することでこの損失を取り戻そうとするなら、この壺は決して満たされぬダナイデスの瓶となる……。かくして一集団としての彼らの富の減少は、その貯蓄にもかかわらず、前と同じ大きさである」(JMK, V: 125)。

④『一般理論』では、『『浪費的な wasteful』公債支出でも、社会を結局豊かにできる』ことが繰り返し説かれている。「ピラミッド建築・地震・戦争ですら、もし古典派経済学の原理を基礎とするわが政治家の教養がもっとよいことの実現を妨げているなら、富の増進に役立ちうる」。「我々は著しい分別をもち、慎重ある理財家にそっくりのように躰られており、子孫のために彼らの住宅を建てて彼らの『金融的』負担を増すような場合には事前に慎重な考慮を払うので、我々には失業の苦難からそんなに簡単に脱出する途がない」(pp.129-31, 傍点追加)。

⑤1937年には次のように述べられた。「なぜ好況はかくも中断させられるのか。説明は難しくない。公衆が、とりわけ彼らの繁栄している時期に、その所得の全部をその年のうちに消費してしまわないからである」(JMK, XXI: 385)。

1919年から1937年までのこれら引用から伺えるのは、その批判のトーンが、後年には貯蓄が経済学的にみても不合理だと示されるに至ったとはいえ、その当初においてはむしろ思想的なものであった点である。とすれば、彼の貯蓄批判の由来を不況に求める必要は全くない。仮に20年代が好況でも、ケインズとピグー＝ラムゼーとは、功利主義をめぐる、したがって貯蓄の意義をめぐる、対立したろう。

VI まとめ

20年代～30年代のケインズの議論は、ピグーおよびラムゼーを含む三者関係の下で、思想的・経済学的にさらに検討する価値がある。

ピグーの着手した将来世代論はラムゼーの助力でさらに発展せしめられたが、彼らを共に特徴づけた功利主義思想に対し、ケインズは独自の立場を崩さなかった。

そしてケインズが「短期」を重視したこと、ま

た「貯蓄」を批判したこと、に関する従来の説明は、もっぱら経済理論・政策論の側面からのもの、すなわち「古典派對ケインズ派」という通俗的構図からのものであったが、真に重要であったのは、実はその背後にある思想であると結論せざるをえない。ピグー＝ラムゼーの功利主義的「長期」規範論なくしては、なぜケインズが「短期」の立場を、思想的にも経済学的にも、かくも力説したのかを十分説明できない。

ところで、ケインズの経済思想の理解にとって「わが孫たち」が重要なのは、そこでの経済的ブリス論が内容を若干変化させながらも、『一般理論』、特に最終章「一般理論の導く社会哲学に関する結論的覚書」に再び現れるからである。同書において彼の掲げた実践目標は、金利生活者を安楽死させるべく、「1世代ないし2世代のうちに〈ある種の定常状態に到達して〉資本から稀少価値を奪うこと」であった(JMK, VII: 376-7)。

すなわち、「・・・私は次のように推論する。すなわち近代的な技術的資源をもち、人口増加が急速でない、正常に運営される社会は、均衡における資本の限界効率を1世代のうちにほぼゼロにまで押し下げよう。その結果、我々は準定常的社会状態に達する。・・・資本の限界効率がゼロになる程にまで資本財を豊富にするのが比較的容易だとする私の仮定が正しいなら、それは資本主義の好ましくない特徴の多くを徐々に除去する最も賢明な方法といえるかもしれぬ。・・・利子生活者は消滅するだろうが、それにもかかわらず、人によって見解の異なりうる予想収益の推定をめぐり、なおも企業と熟練とが活動する余地が残されよう」。「・・・私は資本主義の金利生活者の側面を、それが仕事を果たせば消えさる過渡的局面とみる。そして金利生活者の側面の消滅と共に、資本主義に付随する他の多くのものも一新されよう」(pp.220-1, p.376)。

「わが孫たち」でのエセ道德原理批判では、「歌う」ことが賞揚され、「待つ」ことが批判された。一方『一般理論』では、それが金利生活者(彼らは「待つ」人々の典型と言えよう)の安楽死の予言という経済的表現で述べられている。エセ道德原理も、また同原理の体现者たる金利生活者も、ある特定の歴史段階でのみ存在しうるのであり、

経済的ブリス（ないし資本の限界効率がゼロになる準定常状態）に到達すれば、いずれ消滅する。

ケンブリッジ経済学の中に、定常状態という古典的概念が新たな意味合いをもって復活し、ケインズは「わが孫たち」においても『一般理論』においても、それに独特の実践的意義を付与しているのである。

注

- 1 ケインズ自身はこれを「経済的ブリス」と呼んでいる（*The Collected Writings of J.M. Keynes*, 以下 **JMK** と略す, IX: 331）。なお、ブリス bliss は「至福」の意である。
- 2 これはかつてマーシャルが社会進歩の文脈において指摘した論点である。「・・・余暇をよりよく利用することを学ぼうなら、大部分の人々がより短い時間働くのはおそらくよいことだろう。だが不幸にも、人間性は徐々にしか改善できぬ。余暇をよく利用することを学ぶという困難な課題ほど、緩慢にしか学べないものは他にない」（Marshall, 1961: 720）。
- 3 本稿を通じて、引用中の〈 〉内は筆者の補足である。
- 4 「野の百合がどうして育っているか、考えてみるがよい。働きもせず、紡ぎもしない。しかしあなた方に言うが、栄華をきわめたときのソロモンでさえ、この花の1つほどにも着飾ってはいなかった。・・・だから明日のことを思い煩うな。明日のことは明日自身が思い煩うであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である」（マタイ伝 6: 28-34）。
- 5 死重損失を最小化する（財貨への）課税方法として彼が示したのは、価格弾力性の低い商品ほど重く課税すべきだという原則で、しばしば「逆弾力性ルール inverse elasticity rule」と呼ばれている。弾力性の低い商品は税により価格が上がっても消費・生産への影響が小さく、資源配分の歪みを生みにくいからである。なお、この論文の冒頭では、ピグーの助力・激励に対する謝辞が述べられている。
- 6 ラムゼー・ルールとは、貯蓄に消費限界効用を乗じた値が、ブリスから純総効用を引いた値と常に等しいというもので、以下のように定式化される（Ramsey, 1928: 547, 訳 144）。ただし本節ではこの条件式そのものは重要でない。

$$Y(K, L) - C = \frac{B - [U(C) - V(L)]}{U'(C)}$$
Y: 生産関数 K: 資本ストック L: 労働
C: 消費 B: ブリス U: 消費効用関数
V: 労働不効用関数
- 7 強凹性を仮定せねば、できるだけ多く貯蓄するのが最適である、という単純かつ極端な結論に陥ってしまうからである。
- 8 彼は『ピグー経済学著作集』全 14 巻（Pigou, 1999）の編纂者でもある。

- 9 以上のようなピグーの課税論は、いわゆる彼の「三部作」の 1 冊である『財政の研究』（*A Study in Public Finance*, 1928）で本格的に示される。同書によれば、相続税は、貯蓄意欲を阻害することを通じて、また所得税は、主に勤労意欲を阻害することを通じて、資本蓄積を鈍化させるだろう。一方、消費税ないし支出税は、消費せねば課税されないの、貯蓄＝資本蓄積を促す傾向がある。これらは現代でも通説的な見解といえるものである。
- 10 ここでいう資本家は「眠れる資本家」、すなわち利子生活者であり、「企業家」ではない。両者のそれぞれの経済的役割である「待忍 waiting」と「不確実性負担 uncertainty-bearing」とに関し、『厚生経済学』初版の附録「生産要素としての不確実性負担」では次のように述べられる。「経済学では通例、生産要素として、自然の用役の他に、待忍と、種々の精神的・肉体的労働とを類別する。〈だが〉未来の全ての出来事が完全に予見される世界では、この目録は実質的に適当であろうが、現実世界では、幾つかの未来の出来事は完全に予見されえない。・・・こうした状況下では、上に列挙された生産要素のリストに、様々な種類の不確実性負担からなる一群〈の諸要素〉を加えるのが適当である」（EW 初版: 915）。
- 11 ピグーは、①『財政の研究』の序文でラムゼーに謝辞を述べ、本文中でも彼の課税論を紹介（Pigou, 1928: 126-8）した他、②『厚生経済学』第 4 版でもその数学的助力に謝辞を述べ（p.700）、さらに③『雇用と均衡』（*Employment & Equilibrium*）においてもラムゼーの貯蓄論を紹介した（Pigou, 1999, X: 111）。だが最も重要なのは、④貯蓄論におけるラムゼーとケインズの立場を対比した「安定的環境の下での経済進歩」（“Economic Progress in a Stable Environment,” 1947）であろう。
- 12 ケインズは『貨幣論』でラムゼーに言及した際、一種の強制貯蓄説、すなわち「利潤インフレーションが彼ら〈労働階級〉に押しつける強制的禁欲」という論法によって、ラムゼーとの矛盾を止揚しようとしている。つまり貯蓄などせずとも、現在の消費生活を楽しめば、自ずと貯蓄も生じると（**JMK**, VI: 144-5）。

参考文献

- ・ Collard, David (1996a), “Pigou and Future Generations: A Cambridge Tradition,” *Cambridge Journal of Economics*, 20, pp.585-97.
- ・ Keynes, J.M., *The Collected Writings of J.M. Keynes*, D. Moggridge(ed.), 30 vols., Macmillan Press Ltd, 1971-88.
- ・ Marshall, A., *Principles of Economics*, 9th edn. C.W. Guillebaud(ed.), 2 vols., 1961.
- ・ Moore, G.E., *Principia Ethica*, repr. of 1903edn., Cambridge Univ. Press, 1959. (深谷昭三訳『倫理学原理第3』三和書房, 1973).
- ・ Pigou, A.C., *The Economics of Welfare*, Macmillan,

- 1st edn., 1920, 2nd edn., 1924, 3rd edn., 1929, 4th edn., 1932. (気賀健三・干種義人・鈴木諒・他訳『厚生経済学 (第4版)』東洋経済新報社, 1953).
- , *A Study in Public Finance*, Macmillan, 1st edn., 1928, 2nd edn., 1929, 3rd edn., 1947.
- , *Employment & Equilibrium*, Macmillan, 1st edn., 1941, 2nd edn., 1949. (鈴木諒一訳『雇用と均衡』有斐閣, 1951).
- , "Economic Progress in a Stable Environment," *Economica*, Aug 1947, pp.180-8.
- , *A.C. Pigou Collected Economic Writings*, D. Collard(ed.), 14 vols., Macmillan Press Ltd, 1999.
- Ramsey, F.P., "A Contribution to the theory of Taxation," *EJ*, 1927, pp.47-61.
- , "Mathematical Theory of Saving," *EJ*, 1928, pp.543-59. (西川弘展「F.P. ラムゼー『貯蓄の数学理論』—その試訳、脚注および解題 (1)—」,『大阪市大論集』, 101号, 2001, pp.135-62).
- Schumpeter, J.A., *Ten Great Economists from Marx to Keynes*, George Allen, 1951. (中山伊知郎・東畑精一訳『十大経済学者』日本評論新社, 1952).
- Sidgwick, H., *The Methods of Ethics*, repr. of 1907 edn. Thoemmes Press, 1996.
- 伊藤邦武『ケインズの哲学』岩波書店, 1999.
- 塚崎智「シジウィックの直覚主義」(行安茂編『H. シジウィック研究 —現代正義論への道—』以文社, 1992, 第3章).